学生・生徒諸君
新入生諸君

学校法人日本航空学園
理事長　梅沢　重雄

訓話

南から北へ桜前線が上がり、今山梨キャンパスが満開です。次に能登空港キャンパス、ラストは５月に新千歳空港キャンパスのある北海道は緑の葉と一緒に葉桜として特徴のある咲き方をします。

さて、新型コロナウイルスの影響で学校への登校が延び諸君の心も沈みがちになりますが、今は世界人類が一つとなって、ウイルスとの戦いに勝利しなければなりません。学校の校訓に「礼節を尊び忍耐努力の精神を体得すべし」とあります。忍耐を体得する機会と思い各学校からの指示に基づいてオンライン学習に入ってください。

さて、私から上記の桜について少々解説をしてみたいと思います。

また山梨キャンパスの滑走路から南を望むと見事な富士山が見えます。日本の最も大きな特色「富士と桜の国　日本」と題し日本航空学園の元講師、千葉大学名誉教授だった清水馨八郎先生と私が執筆した「よみがえれ日本―日本再発見―」という書籍から訓話をしたいと思います。

富士と桜の国　日本

一、富士は日本美と平和のシンボル

“元旦や一系の天子富士の山”　静かな元旦の朝を迎える度に日本人に生まれたことを感謝します。それは永遠に平和が続く天子の国、富士の国だからです。
日本は美しい山河の国です。その代表が富士の美です。左右均斉のとれ、天空に聳え立つ容姿の美にあるだけでなく、気候の瑞々しさが醸し出す「玲瓏玉の如し」といった風情の美にもあります。ヒマラヤやアルプスの山々では峻厳、荘厳、雄大といった形容が当たっても、富士の持つ秀麗とか優美といった趣は出ません。

世界には“ナポリを見て死ね”の言い伝えがありますが、日本人には緑の乏しい地中海性のドライな風景は殺風景で耐えられません。ただ西洋で唯一の火山ベスビオが青い地中海を背景にして周囲を圧し、独立して立っているから雄大に見えるだけです。

火山の風景なら、現に噴煙を上げている桜島を背景とする鹿児島の港を、城山から眺めた風光の方が遥かに勝っています。ここを土地の人は「東洋のナポリ」と自慢していますが、ナポリの方が「西洋の鹿児島」と逆に宣伝すべきです。

火山なら日本列島には二百余、活火山も六十ほどあります。富士に似た火山も北の蝦夷富士(羊蹄山）から南の薩摩富士（開聞岳）と十数個あり、夫々特異な風光をかもし出して国立や国定公園になっています。

世界の人々に是非一生に一度、富士を見せてやりたいものです。富士は我々民族の宝であると同時に、世界人類の宝でもあります。世界の人々に「富士を見て死ね」を合言葉にすべきです。美しい日本を世界に開放し、富士の持つ自然美の極致と平和日本のシンボルを売り込まねばなりません。

富士は日本列島が西南日本から東北日本に方向を変えるあたり、日本のほぼ中央に位置して、両方の山系にしっかり足をふんばって、風雪に耐えて数十万年、天に向かって合掌し、民族のために永遠の祈りを捧げているのです。日本人で富士の姿を見た時、いつも端然として襟を正し、言い知れぬ感動を覚えるのはこのためです。

敗戦後、疲れ果てて西の国から東京に帰ってきた私たち復員や引揚者が、通り過ぎた町々の荒廃をみて絶望の極にあった時、駿河の空に忽然と浮かぶ富士の英姿を貨物列車から仰いだ時、どれ程感動したことか。私たちは思わず忘れかけていた「国破れて山河在り、城春にして草木深し」の杜甫の詩を口ずさみました。

富士は「よくぞ帰ってきた。本来の日本列島は北海道、本州、四国、九州の四島国で成り立ち、この母なる大地は一片も失われていないのだ。資源や富は必ずこの国土に隠されているのだ。」と。更に富士は「山のことは鳥に聞け、海のことは魚に聞け、日本のことは富士に聞け」とやさしくさとし、勇気と希望を与えてくれました。

ニーチェの言葉に、苦難の時は「汝の足下を掘れ、そこに泉がある」と。富士はこのことを私たちに教えてくれたのです。資源は失った植民地のなかにあるのではない。日本中の国土の中に隠されている。敗戦の将兵や引揚者は夫々列島の各地に散ってゆき、

開拓に埋立てに全力を投じました。忽ち瑞穂の国の真価が発揮され、米は余るほど大豊作、埋立地は近代的な臨海工業地帯に生まれ変わりました。地域開発、国土開発の言葉も戦後生まれたものです。国民の生来の勤勉と知恵で、忽ち世界第二の経済大国に生まれ変わりました。かくして日本は資源小国で経済大国になれるシステムを開発して、世界の貧しい発展途上国に夢と希望を与えました。

二、富士の美と教訓

富士は教訓的な山です。黎明日本列島の一角に最初の朝日を捉えるのも富士、最後に夕日を送るのも富士です。夕暮れ里人が夕餉のまどいに入るのを見届けて、富士は安心して天空から姿を消し、列島は完全に夜に入るのです。富士は日本一早起きで、日本一おそ寝で、国民の生活を見守っていてくれるのです。喜びも悲しみも幾千年、富士は民族の守護神として、平和のシンボルとして多くの歌によまれ、日本の歴史になくてはならない存在となってきました。

日本列島は太陽が、太平洋の中央の日付変更線を越えて、最初に遭遇する先進国です。だから最高峯の富士の山頂が朝日に輝いた時から地球のある日の歴史は始まるのです。その一時間後に北京が、九時間後にロンドンが、十四時間後にニューヨークの夜が明けるのです。日本はまぎれもなく「太陽の先進国」で「日出ずる国」なのです。

やがて紀元二千年の元旦も、地球上富士山から明けそめるのです。「二十一世紀は日本の世紀」とは天文学的に正しいのです。

母国を離れて旅立つ甲板の人を、海のかなたに最後まで見送ってくれるのも富士、外国から帰った人々を最初に迎えてくれるのも富士です。富士は高きがゆえに、水平線の彼方にいつまでもポッカリ浮かんでいるからです。

三十年振りに帰ってきた敗残兵の横井さんも小野田さんも、富士を見て初めて日本に帰ってきたという実感を持ったとのことです。富士は日本人の心のふるさとで、富士即日本だからです。

日本人が日本という言葉を聞いて第一に連想するのが富士、第二がさくら、第三があさひです。銀行名も富士銀行、さくら銀行、朝日銀行の順に生まれました。フィルムも、富士フィルム、桜フィルムの順です。日本の会社名で一番多いのは富士で、富士製鉄、フジテレビ、富士銀行、富士通、富士電機など、万を数える程です。

三、日本文化の神髄桜賛歌

弥生の春三月、長い冬からの開放感から人々は浮き浮きした気分になります。待ちに待った桜の季節到来です。

● “世の中にたえて桜のなかりせば　春（人）の心ものどけからまし“

と、日本人の桜へのあこがれを歌った在原業平の和歌が代表しています。花と言えば桜を意味し、桜は古代からの日本人の最も愛し親しんだ花で、国花にふさわしいです。

それでは何故日本人は桜をこれ程好きなのでしょう。桜が解れば日本人が解るといわれる程、両者は微妙に結びついています。桜は日本人のやさしく繊細な心の文化と日本美、美意識の神髄なのです。

植物としての桜の特性が、日本人の感性や行動によくマッチしておるからです。これを次の四つに分離してみました。

（一）集団性（同時性、一斉の見事さ）
（二）いさぎよさ（一度に咲き、一度に散る、刹那の美）
（三）はかなさ（花の命、花は桜木、人は武士）
（四）解放感（長い寒い冬からの目覚め、ウキウキ）
（五）なまめかしさ、あでやかさ

上のうち集団性について考えてみます。欧米人はバラ、チューリップのように一つひとつの自己を主張して絢爛豪華に咲く花を愛します。個人、人権を重んずる彼らは個性の美を愛します。対する日本人は桜や萩のように全体の美、総合の美を愛します。桜の花の一リン、一リンは意味がなく、個を集団の中に没して社会や国といった集団、全体の中に生き甲斐を感じます。

桜の花弁一つだけ取っても頼りなく寂しい。これは日本人の国民性をよく表しています。一人ぽっちの日本人は頼りないが、群れをなすと俄に活気づきます。桜の下の酒宴になると人が変わったようにはしゃぎますが、ひとりでおくと借りてきた猫のようにおとなしい。集団国民性が桜の季節になると発揮されます。

日本人の心とは何かと問われたら本居宣長の

● 敷島の大和心を人問わば、朝日に匂う、山桜花

と答えればよいのです。また生涯、全国を旅して雲水の境地を愛した西行法師は、

● 願わくは花の下にて　春死なん　その如月の　望月の頃

と詠んで、かくの如く桜の下で死にたい、これが日本人共通の願いです。

古来から花と言えば桜のこととして多くの詩歌が詠まれてきました。万葉集には四三、古今和歌集には七四ものっています。百人一首の最秀詩といわれるのは紀友則の次の詩です。

● 久方の　光のどけき　春の日に
　しず心なく　花の散るらん

やわらかに春の日ざしを受けて、桜の花が独り静かに散ってゆく、どこの里にもある普通の春の平和な国土の風景です。何のてらいもない、このごく単純な平和そのものの風景こそ、日本人の神髄です。更に百人一首では伊勢大輔が同じ平和を詠んでいます。

● 古の奈良の都の　八重桜
　今日　九重に　匂いぬるかな

次に小野小町のような絶世の美人も、やがて桜の花のように散り老いさらばえてゆくのだと、人間や美人のはかなさを歌っています。

● 花の色は　うつりにけりな　いたずらに
　我が身　世にふる　ながめせし間に

桜のはかなさ、別れのつらさを花に託して詠んだものも多い。

● 桜の花　散り散りにしも　別れゆく
　遠き一人と　君もなりなん

● 散る桜、残る（愛でる）桜も　散る桜

若くて死んでゆく人、残った人をなぐさめるのにこれほどピッタリの句はありません。

時世の句に日本人は桜の花を連想します。三十代で突然おとずれた切腹、浅野内匠頭長矩の句は短い一生を惜しんで余りあります。

● 風誘う　花よりもなお　我はまた
　春の名残りを　いかにとはせん

桜は死に際のいさぎよさで昔からもののふ、軍人精神にも最もマッチした花です。九段の桜、同期の桜、愛国の花としてどれ程詠まれたかはかり知れません。陸軍の徽章は桜であり、海軍は桜と錨でした。

貴様と俺とは「同期の桜」は軍人ではなくとも人生の同期の仲間にこれほどしみじみ感傷にふける歌詞とメロディはありません。咲いた花なら散るのは覚悟、花の都の靖国神社、春の梢に咲いて会おう。桜ほど軍人の死を恐れず死を称える勇気となぐさめを与える花はないのでしょうか。

次に山里の春、都の春のものうい情景を歌うのに桜は欠かせません

● 見渡せば柳桜を　こきまぜて
　都ぞ　春の　にしきなりけり（素性法師）

● 花の雲　鐘は　上野か　浅草か（芭蕉）

● サクラ　サクラ　弥生の　空は　見渡す限り
　雲か雲か匂い生づる　いざやいざや　身にゆかん（琴歌）

桜音頭は昭和十年前後、東京音頭に次いで一世を風靡し、今でも盆踊りには欠かせません。

最後に源義家のような武将でさえやさしい心情を吐露した秀歌を忘れないで下さい。

● 吹く風を　な勿（勿来）の関と思えども
　道もせに散る　山桜かな